



三重県公立小中学校教頭会
〒514-0003 津市桜橋2丁目142
教育文化会館別館3階
TEL 059 (228) 2340
FAX 059 (228) 2271
E-mail:mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

重 点 取 組

(単位教頭会より)

夢に向かってがんばる木曽岬っ子応援キャンペーン

桑名市・桑名郡教頭会 木曽岬町立木曽岬小学校 坂 口 綾

木曽岬町では、“木曽岬町ならではの”教育の充実に向けて重点的に取り組む項目を「オリジナル5」として教育活動の推進に努めています。

「オリジナル5」の中の1つには「郷土教育」があります。今年度はウィズコロナということで3年ぶりに地域で受け継がれている“木曽岬音頭・小唄”を保存会の方に指導していただく機会を復活させました。また、その前段として、タブレット端末を活用し全児童が家庭で踊りの動画視聴に取り組みました。他にも愛好家のみなさんとともに「どてかばちゃづくり」に取り組んだり、「伊勢湾台風」の学習をしたりしています。

さらに今年度からは「オリジナル5」に「プラス1」の取り組みが加わりました。「プラス1」とは、学習習慣の確立です。昨年度の生活アンケートの結果から、4人に1人が平日に4時間以上ゲームをしているという子ども達の実態を受けた取り組みです。たとえ1時間でもゲームをしていた時間を自分の将来を考える時間、そのための学習や読書の時間にしたいとの思いで「学習習慣の確立に向けて＝夢に向かってがんばる木

曽岬っ子応援キャンペーン＝」と呼んでいます。

年度初めに、子ども達は、自分の夢や目標を宣言することからスタートしました。自分のことをじっくり考え「わたしのがんばり宣言」に書き、家に持ち帰って家族に話をします。家族はその内容を聞いて、どうやって応援していくのかを具体的に考え、「我が家の応援プログラム」としてまとめます。家庭では生活リズムの見直しや家庭学習の充実につながっていくよう毎日見る場所に掲示し、定期的にその進捗状況について励ましやアドバイスをしていくこととしています。このキャンペーンは、生活習慣を改善し、子ども達が夢や目標に向かって意欲的に取り組むことができるよう、こども園・小学校・中学校・教育委員会・青少年育成町民会議・家庭・地域が連携・協力して進め、子ども達の豊かな学びを共に支えます。

キャンペーンをきっかけに、学校と家庭が



一体となって子どもたちの下支えをし、学校では授業改善やICT機器を活用した教育活動に生かされ、学力向上につながることを期待しています。

自ら主体的な学び・協働的なつながりを

員弁郡・いなべ市教頭会 いなべ市立三里小学校 小林 晃也

1 基本方針

- (1) 変化の激しいこの時代の中で、教育者としての教養と専門性を研ぎ、学校の管理・運営者として必要な能力を高める。
- (2) 「生きる力」と「豊かな人間性」を育成するための教育実践に努める。
- (3) 員弁郡・いなべ市教頭会の活力を高め、組織の発展・強化に努める。

2 重点課題

学校を取り巻く社会情勢や教育改革の動向を的確に把握し、今日的な教育諸課題の解決に向け、教頭としての役割と対応及び解決方法を研究・検証するとともに、教頭同士・外部との連携を深める。教頭自身が主体的な学びを行い、他者と協働的なつながりが構築できるようにする。

3 重点課題の設定理由

昨年度は、「今日的課題」に対応するため、郡市の教育長を招いて研修したり、学校でのコロナ対応について学び合ったりしました。教育長の教育観や方針に直接触れることで、すべきことがより鮮明になり、より一層責任や誇りを持つことができました。また、喫緊の課題であったコロナ対応について、具体的な事例を交流することで、より適切な対応へつなげることができました。

今年度も、教頭としてのリーダーシップを発揮するため、自らの資質や能力を高める努力を続けていくためにも、昨年度の研修形態を継承しながら、①今日的な課題に関する学習会 ②情報交換を密に教頭同士の連携を深める交流会の2点のバランスを考えながら、研修を進めて



写真は、校長会・教頭会二役会のような様子です。

いきます。また、外部との連携強化に努めることで、教頭自身の視野を広げたいと考えます。教頭として、抱える課題や悩みも多くありますが、新たな6名の教頭とともに教頭同士の交流、連携を深めながら、課題解決に向けてともに支え合っていきたいと考えます。写真にもあるように、校長会など関係機関との連携を強化し、具体的な成果が出るように努めます。

4 具体的な研修計画

- ① 「地域に根ざした学校づくり」…役所の広報課の方に発信の重要性・方法について学ぶ
- ② 「支援の必要な子どもたちの学びを支える」…子ども家庭課の方を講師に学校ができる支援を学ぶ
- ③ 「問題行動等対応について」…県SSWを講師に問題行動があった時の教頭としての対応を学ぶ
- ④ ①～③などの学びをもとにしながら、教頭同士が意見を交わす交流会の設定

特色ある学校づくりを進めるために

四日市市小学校教頭会 四日市市立四郷小学校 重内 庸司

本校では、カリキュラム・マネジメントの3つの側面の中で「地域と連携し、よりよい学校教育をめざすこと」に着目し、四日市版コミュニティスクール（以後CSと表記）を基にした四日市市の取組を紹介する。

1 地域人材を活用したCSの活動の充実

本市では、各学校において、人的（ゲストティーチャーの活用）、物的（教育資源や学習環境）支援などが組織的・継続的に行われるように、組織体制の整備を図っている。例えば、令和3

年2月に文部科学大臣表彰を受賞した四郷小学校では、クラブ・図書・安全パトロール・学習支援の4つのボランティアが学校の教育活動を支えている。地域学習「四郷探索 四郷を知ろう」では、CS委員が中心となって、各地区の建物や自然等を巡り、歴史などを教えている(右写真)。

また、中学校区の園・小中学校が地域と連携し世代を超えた交流をもったり、地域行事に積極的に参加したりすることでCS活動の充実を図っている。

2 学校と家庭、地域の教育力の向上

学校は、CSやPTA活動等の場において地域等の声を聞き積極的に教育活動に生かすことで、学校と地域の協働した活動等の充実を図っている。

また、家庭教育のあり方について、保護者が学ぶことのできる機会を設けたり、家庭教育を支援したりする啓発を行っている。例えば、e-ネット出前講座等を活用し、メディアとの付き合い方を保護者に考えてもらう機会をもったり、PTAが中心になって家庭教育講座を実施し、子育てやより良い親子の関係を学ぶ機会を持つ



たりしている学校がある。

3 まとめ

本市では、CSを中心とした「地域とともにある特色のある学校づくり」が進められているが、教職員の入れ替わりが進む中で、活動の意義などを継承させていくという点では難しさを感じる場面がある。また、コロナ禍において従来通りの方法で取組が実施できない実態もある。今後も子どもたちの資質・能力を育む活動が「活動あって学びなし」にならないように、教頭として適切にマネジメントしていく必要がある。

タブレット端末を「学びの文房具」に

四日市市中学校教頭会 四日市市立港中学校 高井 洋

昨年度は、国のGIGAスクール構想により、四日市市においても市内全児童生徒に1人1台のタブレットが配布され、「タブレット元年」ということでオンライン授業等、様々な分野での活用を進めてきました。2年目となる今年度は、四日市市GIGAスクール構想において、鉛筆や消しゴム、辞書と同じように“調べる”“まとめる”“発表する”“文書を受け取る・提出す



る”など、必要な場面において文房具の1つとしてタブレット端末を使いこなし、学習していくことで子どもの学びを深めていくことを目標にしています。また、教科書と同じように毎日家庭にタブレット端末を持ち帰り、学校において学習したことの復習や明日の授業の予習にも活用することを目指しています。タブレット端末の活用を促進するために、昨年度導入した「iプリ」に加え、AIドリルの「ドリルパーク」もさらに加え、その活用も進めています。今後は、web上での学習のポータルサイトである「こにゅうどうくん学びの部屋」を開設していきます。ソフトウェアの活用だけではなく、この夏休みには高速大容量のネットワーク環境とクラウド環境の整備も進めていきます。ハードとソフトの両面から生徒の学びを支援していくことになります。

このような四日市市の流れの中で、本校においても学びのスタイルを変えていくための取組

を始めています。市内の他校と同様に、タブレットの家庭への持ち帰りを始めました。生徒はドリルパークからの宿題を家庭で取り組んでいます。教科担当の教師は、生徒が取り組んだ宿題の進捗状況や結果をオンラインで確認し、生徒へのアドバイスや励ましの言葉も送っています。

さらに、この様な取組を可能にするために教師のICT活用能力のスキルアップにも努めて

います。講師を呼んでの研修会、OJTによる使い方トレーニング、教育委員会から月2回派遣されるICTサポーターの授業での活用など、全教職員がタブレットを文房具と同じように使いこなすために努力しています。今後四日市市では、教員にも1人1台タブレットが支給され、職員室での教材作成や生徒との様々な活動場面でのタブレットの活用が期待されています。

1人1台端末の活用

三重郡教頭会 菰野町立菰野小学校 白井 聡

三重郡は、朝日町、川越町、菰野町の3町からなり、12の小中学校（小学校8校、中学校4校）があります。

菰野町（小学校5校、中学校2校）では、昨年度2学期初めに1人1台端末が導入されました。導入されてすぐに休校になり、児童生徒は端末を家に持ち帰りました。休校中、高学年以上は端末を使用し、オンラインで交流をしました。

休校が明け、授業再開後は、どこの学校でもそうであると思いますが、菰野町内でもどのように1人1台端末を活用していくのが課題となっています。授業中に「端末の画面がモニタに映らない」「児童の端末が開かない」「アカウント、パスワードが分からない」「デジタル教科書が開かない」「デジタルドリルに入れない」…などのトラブルがありながら、先生たちは、1人1台端末を授業で活用しようと奮闘しています。私も、できる限り先生たちの力になれるようサポートをしています。

本校では、コロナウイルスなどの影響で、学校に登校できなくなった児童が何人かいました。そこで、町より配信用の端末を貸与してもらい、登校できない児童生徒のために、学校での授業

を配信することになりました。

授業では、教師用の端末を使用しているため、配信用には使えません。貸与された端末を配信専用としました。配信専用の端末は、1台は黒板を映し、もう1台は教師用端末の画面を映しているモニタを映しました。配信画面を受け取る児童は、画面を切り替え、黒板を見たり、モニタを見たりして、授業に参加しました。配信する教師側は、事前に設定を練習しておいたので、当日に慌てることもありませんでした。配信を受け取る児童も、当日の操作に困ることもありませんでした。また、端末や回線でトラブルになることもなく、授業をスムーズに配信することができました。

授業中だけでなく、朝の会や休み時間にも配信はつないでおきました。朝の会で健康観察をしたり（写真）、休み時間に画面越しに会話をしたりする児童を見ると、「時代は変わっているのだな。これも新しいコミュニケーションの形なんだな」と思われました。

今後も、1人1台端末の効果的な活用法を研究し、新しい可能性を見つけてチャレンジしていく必要があると思いました。



地域とともにつくる学校

鈴鹿市教頭会

鈴鹿市立愛宕小学校

樋

口

裕

康

新型コロナウイルスのオミクロン株による猛威が日本中を席卷し、連日、全国で感染者数の記録が更新されています。鈴鹿市でも多くの市民が罹患しており、子どもたちが学校に出てこられない状況が続いています。鈴鹿市教頭会に所属する各校教頭は、学校での現状や取組等をお互いに情報交換しながら、この大変な状況に対応しつつ、日々の学校運営に奮闘しています。一方で、コロナ禍における新しい生活様式を踏まえながら、学校や地域の行事内容を見直して取り組もうとする動きが徐々に始まっています。

私の勤務する愛宕小学校は、市の東側の海沿いに立地しています。浜風に乗って穏やかな波の音が聞こえてきます。学校教育目標に「知・徳・体の調和がとれ、主体的・協働的に行動できる子どもの育成」を掲げ、「互いに認め合い、学び合うことで、子どもも教師も成長していく学校」「地域や保護者に信頼され、ともに創り上げる学校」を目指しています。

また、鈴鹿市では、全ての公立小中学校に学校運営協議会が設置され、学校と地域や保護者が連携し、協働的な地域づくりと子育て支援が行われています。本校でも、「愛宕地区地域づくり協議会」の方々が運営委員となっていていただき、子どもたちの成長を支援する活動や行事を提案・運営していただいています。コロナ禍以前は、地域の方々が中心となって、子どもたちが主役となるイベントを行っていましたが、この2年間は中止されていました。今年は、地域の方々が、子どもたちが主役のイベントを復活させたいという熱い思いもあり、感染防止対策を講じて「あたごの灯り」というイベントに取り組みしました。

「あたごの灯り」とは、1学期終業式の日、夜、「あたごっちボランティア」と呼ばれる有志で参加した5・6年生児童が中心となり、運動場にLEDのキャンドルライトを並べ、子どもたちが考えたデザインをキャンドルライトで灯す本校の伝統行事です。「あたごっちボランティア」は、地域づくり協議会青少年育成部会の方々にご指導いただきながら、休み時間や放課後に着々と準備を進めてきました。また、当日の運営や進行も行いました。



前日の深夜まで雨が降っていたため、当日の朝は運動場が池のように水浸しになっていました。子どもたちは、何としても地域の大切な行事を成功させたいと思っていました。そこで、始業前、「あたごっちボランティア」をはじめ、高学年の児童全員と学校教職員が一丸となって水取りをしました。靴や服が汚れても気にせず、笑顔で一生懸命水取りを頑張りました。おかげで、午後には、運動場が最高の状態になりました。

地域づくり協議会の方々が午前中に白線でデザインを描き、夕方から「あたごっちボランティア」が丁寧にキャンドルライトを並べていきました。開会式が始まる午後7時には、子どもたちだけでなくたくさんの地域の方が学校に集まってきました。徐々に辺りが暗くなり、キャンドルの輝きが増すと、「へいわ」というハートに包まれた文字と花火が浮かび上がりました。その灯りを見つめていた子どもたちや地域の方から笑顔があふれていました。勿論、「あたごっちボランティア」も充実感にあふれた笑顔でした。

子どもたちが地域の方々と心でつながり、自ら考え活動していく姿は、私たちが目指すところの一つです。これは、子どもが主役となる貴重な機会を作ってくださった地域の方々のおかげです。コロナ禍の終息の兆しは見え、将来の予測はますます困難だと言えます。私たちは、地域や保護者と協働して困難を乗り越え、子どもが主役となる学校を地域とともに育んでいきたいと考えています。

他校、他地域に学ぶ ～校務支援システム導入へ向けて～

亀山市教頭会 亀山市立関小学校 加藤 元 由

毎月、市内14校の小中学校教頭15人が集まって、市内小中教頭会を開催しています。自然豊かな関町にある関文化交流センター（写真の建物です）の一室をお借りし、研修や協議をおこなっていますが、急な対応などで、全員が集まれないことが多いのはとても残念です。

この会の協議事項の最後に「各校の諸課題について」という項があります。6月末の会では、休日のコロナ対応やサマースクールの日数、脅迫メールへの対応、熱中症対策、プール水泳についてなど、さまざまな課題について、各校の実情を報告しあいました。同じ市内であっても地域によってさまざまな事情があることがわかり、他校の実践に学ぶ機会となるたいへん貴重な場です。



6月末に最も多く意見が交わされたのは、校務支援システム導入の話題です。亀山市では、この冬から導入が進み、次年度より稼働となりますが、まだ、その詳細が見えてきません。

入札や契約、帳票の登録やシステム設定の期間を経て、1月～3月には教職員に対する研修と試験運用がおこなわれるそうです。他の郡市ではすでに運用されているところも多いと思いますが、我々としては、先行されている地域から学びたいです。

正直、データの移行やセキュリティに関することは不安ですし、初期不良が起きたときや困ったときのサポート態勢がどの程度手厚いものなのか知りたいです。

教育委員会事務局としても、まずは県内、そして他の都道府県の実態をリサーチし、成功例や失敗例を収集し、反映しようとしているとは思いますが。こういったシステムについては、一度導入してしまっただけからの変更は容易ではありません。このような場合こそ県、そして全国の教頭会のネットワークが活用でき、ご助言やご指摘をいただけたらありがたいです。

働き方改革という視点で、役立つためのシステム導入であるはずですが。「かえって、こんな問題が生じた」などということがないように願っています。

コロナ禍から考える学校現場におけるニューノーマル

津市北地区教頭会 津市立芸濃中学校 佐藤 文 規

周知のとおり令和2・3年度は年間を通じて新型コロナウイルス感染拡大の波が繰り返しおとずれ、学校現場はその対応に追われながら日々活動していた時期になります。突如余儀なくされた非日常からニューノーマルの授業・働き方へと学校現場が大きく変遷しました。このような中で本校が取り組んできた姿を紹介します。

（1）柔軟に対応したGAGAスクール構想

令和3年度、新任教頭としてスタートした学校現場では、年度当初よりコロナ対応に追われつつも、教科担当はタブレットを取り入れた授

業展開へ柔軟にシフトしていきました。中には、PC/Tb機器操作が不得手な先生方も一定数いましたが、学校長の“生徒も授業者も習うより慣れる！”という方針も力強く後押しし、本校のタブレット活用率は市内でも高水準になりました。

そして、2学期にもなるとコロナの影響は学校現場で大きく広がり、家庭においても学習がスムーズに行えるよう、「ロイロノートスクール」、「みんなの学習クラブタブレット」「e-learningポータル」といった授業支援ツールを積極的に

取り入れるなど、職場全体として活用技術が大きく飛躍した一年になりました。令和3年度から4年度になり、本校にも新しい風が入る中で、本校の授業スタイルも教科・学年でスムーズな引継ぎが行われ、学校としてはぶれることなく新年度がスタートしたと感じています。

(2) コロナ禍からニューノーマルとして

コロナ禍の非日常だからこそ学校現場で再認識させられたこともありました。様々な行事を見送らざるを得ない状況になったことで、学校本来の授業研究に力を注ぐ時間的・精神的ゆとりが生まれ、これまでの「学校行事に追われる学校、学校行事の合間の授業」から「授業の合間の学校行事」へと大きく転換しました。

ニューノーマルは、本来「変化の前には戻らない」というニュアンスを含んでいると言われています。この2年間の授業を中心とした学校の成果は、本来の“授業ファースト”であることの重要性を再確認させられた機会となったように感じています。この「変化の前には戻らない」という微妙な意味合いを考えつつ、“授業ファースト”が持続可能なこととして今後も根付いて



いくことを願っています。

GIGAスクール構想は、学校現場の教員側の授業改革を推し進め、現在はベテランから初任者までタブレット端末を活用した内容も一定レベルを維持しながら取り組んでいます。そして、大人から見ると生徒にとって技能習得は容易いことで、子どもたちの適応力には驚くばかりです。この授業スタイルがニューノーマルとして基準点となり、授業研究・授業改革が積み上げられ、未来を生きる子どもの礎になることを願うばかりです。

中学校区で進める取組

津市中地区教頭会 津市立片田小学校 大 杉 司 和

片田小学校が属する西郊中学校区の全体的な特徴や課題、それに向けてどうしていくか等、校区で進める取組について紹介します。

まず、校区の特徴ですが、校区は、安東、片田、神戸、櫛形、西が丘の5小学校区に分かれ、その範囲は非常に広く、各小学校の規模は大小様々です。各学校・園は、地域の人々や施設と交流を深める活動を行っており、地域と非常に強いつながりをもっています。



児童生徒は、農村や団地等の様々な環境のもと素直で伸び伸びと生活しており、落ち着いた態度で学習に取り組んでいます。また、学校行事等の学習活動に意欲的であるとともに、決まりや約束を守る児童生徒が多いのも特徴です。

次に課題ですが、児童生徒の学力に2極化の傾向が見られるため、家庭や地域と連携しながら自主学習やノーメディア・デー等の学力向上に向けての取組を推進していかなければならないことがあります。また、児童生徒一人ひとりは、落ち着いて学習や諸活動に取り組んでいるが、自主的に行動し互いに思いや考えを伝え合って協働・協調する力、関わりを通してより良い人間関係を築く力にも課題が見られます。そこで、令和4年度に特に力を入れる取組として、「小中9年間の系統的なカリキュラムをもとにした、『学び合い』につながる言語活動の実践と交流を通して、子どもの学力向上を目指す。」を掲げ、その具体的取組として次の3つを進めていきます。

- ① 各校の公開授業を参観し合うことを通して児童生徒の実態を把握するとともに、学力向上に向けた指導について研修を深めます。
- ② 家庭学習0時間の児童生徒をなくすこと、また、少なくとも学年に応じた時間は家庭学習する児童生徒の割合を全国平均まで引き上げることがをめざし、学習習慣の定着および基礎学力向上のために「家庭学習の手

引き」、「自主学習のきまり」を活用した取組を行い、家庭学習の定着・充実を図ります。

- ③ 毎日10分以上読書する児童生徒の割合を全国平均まで引き上げること、また、図書館を全く利用しない児童生徒をなくすことを目標に、朝読や読み聞かせの励行、図書館経営の効果的な取組により、読書習慣の定着を図ります。

すべては子どもたちの笑顔のために

津市南地区教頭会 津市立香海中学校 奥 山 真 司

津市南地区は、7つの中学校区、23の小中学校で構成されています。令和4年度は私が南地区の会長となり、6人の役員とともに3つの柱で運営していくこととしました。

1 ホットとする教頭会

コロナ禍も3年目を迎える中、未曾有の第7波を受けて各校の管理職は相当疲弊しています。それでも国がまん延防止等の措置を安易に出さないことから、集合研修が可能となってきています。多忙な中、教頭会に集まっていたいたとき「話しやすい雰囲気」「ホットとできる雰囲気」を出していきたいです。私は、職場でみなさんが話しかけてきたとき、「まず、しっかり話を聴く」「できることはすぐに対応する」ことを心がけています。これは、電話や来客への対応にも生かされます。「次の教頭会、楽しみやな」と少しでも感じてもらうことを目指します。

2 実務に役立つ教頭会

研修会は、普段の仕事に直接役立つものにしたと、7月の研修会は「9月調査に向けて」とし、教育委員会事務局学校教育課の管理主事に講師をしていただきます。特別支援学級に所属する児童生徒は増加してきており、特に1年

目の教頭にとって、生徒実態報告書から所属態様報告書の作成は苦慮するものです。それを中学校区でグループワークを行い、管理主事にチェックしていただく内容としました。津市は、8月4日が提出締切であるため7月25日に開催します。この機会に、調査のチェックに加えて中学校区での児童生徒の情報交換の場としても活用してもらえることを願っています。

3 持続可能な教頭会

「そもそも教頭会は必要な組織なのか?」「教頭職についたら必ず教頭会に入らなければならないのか?」といった声があります。今まで積み上げてきたものを踏襲するのであれば、少なくとも学校を離れて教頭会のために時間を費やすことになります。持続可能な教頭会にしておくためには、会長・書記・会計・県教頭会の役員や理事の仕事内容はどんなものか等、誰もが分かりやすい組織にするとともに、それぞれの学校における子どもたちのためになる活動にしていく必要があります。すべては子どもたちの笑顔につながるよう、23人の教頭会をやり多きものにしていきたいです。



3年ぶりに「松阪市公立小中学校教頭会研修会」を開催して

松阪市教頭会 松阪市立大河内小学校 板谷 昌幸

新型コロナウイルス感染症の影響で、令和2年度、令和3年度と、それまで行われてきた教頭会研修会が開催されませんでした。つまりこの2年間、市内の全教頭が集う研修会等において、松阪市教育委員会教育長をはじめ、教育に関係するどなたのお話も聞くことができませんでした。そこで、昨年度末に新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き始めていたため、令和4年度は教頭会として集合研修の開催を決定しました。そして、この場で教育長のお話をお聞きしたいとお願いしたところ、快諾していただきました。

5月9日、第1回研修会として、中田雅喜教育長より「今求められる教育」という演題でお話をいただきました。内容は、「新型コロナウイルス感染症拡大に関わる様々な課題」「GIGAスクール構想に対する課題」「定年延長について」「小学校教科担任制の推進について」「部活動の地域移行について」「不登校・いじめ対策について」「故郷教育について」「小学校の

英語教育について」「新学習指導要領の実施について」等多岐にわたるものでした。

続けて6月2日に第2回研修会を開催しました。今回は、村田佳之教育委員会事務局次長より「松阪市の教育の方向性と教頭の役割について」という演題でお話をいただきました。内容は、「松阪市教育ビジョンについて」「教頭に求めたいこと」「4つの視点について」「組織の維持と管理について」「松阪市の重点課題の把握について」等、やはり多岐にわたるものでした。

教育長と次長のお話をお聞きし、改めて教頭の職責の重さを再確認するとともに、「よし、明日からまた頑張ろう。」という気持ちを持つことができました。そして何より、教育長と次長のお顔を拝見し、生の声を聞かせていただくことを通して、このコロナ禍の中で、たくさんの元気をいただいたのは私だけではないはずです。今年は、3年ぶりに研修会を開催することができて、本当によかったと実感しています。

コロナ禍の中で

多気郡教頭会 大台町立日進小学校 青木 麻純

2年余りに及ぶコロナ禍は様々な変化をもたらし、多気郡教頭会も活動の大半を中止せざるを得ない年が続いています。収束の兆しかと期待すると変異株が現れたり人の流れが多くなる時期に入ったりと感染拡大が繰り返され、先を見通すことが難しい状況が続く中、4月の新旧役員理事会において今年度の事業計画等を検討しました。同じ職に携わる方々と繋がり学び合う機会を可能な限り失くしてはいけないという思いは抱きながら、やはり今年度もまだ実施は難しいとの判断で、本会の主な活動である先進校視察とその交流の場である研究発表会の中止を決めました。対面し参集することはなかなか叶いませんが、連絡時のふとした会話や日頃の情報交換の中に小さな繋がりを感じている昨今です。

同様に校内でも、行事や活動の縮小・中止を



余儀なくされていますが、我慢や憂慮ばかりではなく、この機会を活かし、不要なものは精選し引き継ぐべきものは随時修正改善しながら繋いでいかなければと思います。感染状況に拘らず可能な方法や新たな仕組みを模索し、この時期にこそできることに取り組んでいかなけれ

ばならないと考えています。

その一つとして、コロナ禍ゆえに、本校ではICTの活用が大きく推進されました。閉鎖や出席停止中の児童とのオンライン授業、健康チェックのデータ受信、密や対面を避けるための機器の活用…迫る課題に対処するために利用が増えたことと、ICT支援員の訪問支援（本町では昨年から各校月3回程、授業支援、機器使用時の相談やトラブル対応、研修や活用事例の情報提供等をしていただいています）により、

教職員にも児童にもICT機器がぐんと身近なものになりました。オンライン授業支援ツールの活用で、私も校務に係る時間が少しずつ短縮しています。

他校に比べればまだまだの状態だと思いますが、‘繰り返し触れることで習得する’‘様々な試すことで関心が広がり発見が増える’‘協働により理解が一層深まる’…と子どもたちの学習を追体験しながら、学ぶ楽しさも味わい、更に活用・推進していきたいと思っています。

地域とともに取り組む防災学習

伊勢市教頭会 伊勢市立中島小学校 東 一郎

伊勢市教頭会は小中32校、34人からなる。新型コロナウイルスの感染拡大による対応から市教頭会は、参集型としては実施せずWeb会議システムで必要最小限行っている。そんな中、今年は防災教育について重点的に取り組むこととなった。学校は避難所ともなる。地域との連携は必要不可欠であり、日々の交流を進めていくことが大切である。そのスタンスに立ち、中島小学校では地域住民との防災学習を実施した。これは香川大学の竹ノ内先生主導のもと、人と防災未来センターの河田先生の協力を得て、地域の中島学区まちづくり協議会が各学年の児童に防災について学習を行うものである。1～4年は1時間、5～6年は3時間実施した。具体的には

【1年生】 災害発生時の動作を知る。（防災ダッ

ク）過去の災害事例を基に、災害が起きたときどんな危険があるかを確認し、その時の身を守る動作を「防災ダック」というゲームを通じ学ぶ。

【2年生】 災害と自分の関係を考える。（ぼうさい紙しばい）防災についての紙芝居を聞いたり、被災地の小学生の感想文を朗読し、自分の身に災害が起きたらどう思うか、感想文にまとめる。

【3年生】 災害時の問題について話し合う（クロスロードゲーム）ゲーム形式で、災害が起きた際の行動について、みんなの意見を聞きながら確かめる。

【4年生】 避難生活を知る。自分でもできることを考える。（助け合いマッチング）過去の災害発生後の様子を確認し、災害後どんなことが問題になったり、何が必要になるか確認し、自分でもできることがないか考える。



【5年生】 気象情報を知る（気象台による出前授業）情報から災害への備え方を学ぶ。

【6年生】 中島学区と宮川。宮川を対象とした「水害からいのちを守るために」の副読本を活用し、地域災害について学ぶ。

【5, 6年生・住民】 わが家の地震対策を考える。地域住民の話を聞きながら、一人ひとりの家の

地震への備えについて、児童と保護者とが一緒に考える。

という内容で全学年が様々な方からWeb会議システムを使い防災について教えていただいた。多くのことを学ぶことができたとともに、地域の方と画面を通じてではあるが交流できたことは大きな成果であった。

働き方改革・業務精選における教頭の役割

度会郡小中学校教頭会 南島東小学校 福井 幸久

日々、業務に追われる教頭であるからこそ、日々の取組や困りごと等の意見交換・情報交換を教頭間で行い、働き方改革・業務の精選につなげていきたいと考えている。コロナ禍のため昨年度は集まって話し合う場が持てず、オンライン開催となり、直接顔を合わせないまま過ごした1年であった。今年度は、小グループにわかれ研修を行い、顔を合わせて意見交換や情報交換ができる場を設けた。

働き方改革、超過勤務時間削減等が課題となる中、新型コロナウイルス感染症対応が増え、教頭を含め教職員の負担増となっている。そこで、テーマを「働き方改革・業務精選における教頭の役割」とし、働き方改革＝超過勤務時間削減ではなく、児童生徒を第一に考え、業務の質を向上させながらも、働き方改革について教頭として提案や支援できる実際の取組や課題を出し合った。記録の一部ではあるが、以下にまとめた。

1 勤務時間の工夫

①日課表の休み時間10分短縮、児童生徒の下校時刻を早め、学級業務の時間増。②SSSの有効活用。依頼内容の優先順位を再考。③教育アシスタントの活用。④定時退校日の設定（個々に退校日を設定）。⑤朝の打ち合わせを無くし、週1回放課後に。⑥児童生徒の少人数化が進む

中、合同授業の実施（職員の空き時間の確保）

2 会議等の工夫

①提案時の所用時間設定。②朝の打ち合わせを無くし、週1回放課後に実施。また提案事項は、共有フォルダで管理し時間短縮。

3 ICT機器の活用

①職員会議のペーパーレス化。PDFファイル共有フォルダ入れてPCで確認。②児童・生徒のテストを端末で行い、自動採点。③保護者アンケート等を校務支援システム等で実施、自動集計。④学校日誌等をデータ管理し年間行事予定・月予定・校務日誌全てに反映させる形に。

4 行事等

①体育祭の平日開催、運動会の午前開催。②入学式および卒業式の来賓者数を最小限に。

出されたものが自分の学校に合っているかどうかの見定めも重要である。小規模校の保護者アンケート等では、紙媒体の方が回収率が高いなど。自分の学校に合うか合わないかは、複数の選択肢があるからこそ考えられるものであり、今回のように意見交流することで得られるものが多かったと感じる。職場内での仲間を大切にすると共に、職場を越えて互いに連携・支え合いながら、よりよい職場環境を築いていきたい。

各校での特別支援教育における教頭としての役割

鳥羽市教頭会 鳥羽市立鳥羽小学校 奥山 能隆

近年、特別支援学級在籍児童・生徒は増加してきており、各学校における取組を交流するとともに、教頭としての関わり方について研究をしていきたいと考えた。本会においてすすめた

研究を、各学校においてよりよい支援体制を構築していくことにつなげたいという思いで、「各校での特別支援教育における教頭としての役割」を重点として取り組むこととした。

第一歩として、各学校の現状報告を行った。学校によって特別支援学級在籍児童生徒数に違いはあるが、主な取り組みとしては、概ね以下のようにまとめることができる。

このような取組について、教頭としてのよりよい関わりを見出したり、必要に応じて組み合わせを取り組んだりすることで、よりよい支援体制を整えることにつなげていきたい。

1 組織作り

- ・ チームとして進める
ミドルリーダーの教員をコーディネーターとし、チームとして支援や連携を進められる態勢を整えた。
- ・ 定期的にプロジェクトチームの会議
時間を決めて開催し、情報交換を実施している。そこで交換された情報は、参加者からすべての職員に伝えられるようにしている。
- ・ 支援員と特別支援学級担任の情報交換
定期的に開催している。周知事項を伝えたり、支援員からの情報提供を受けたりするなどして、子どもの実態把握等に努めている。

2 情報交換、情報共有

- ・ 朝の打ち合わせ・職員会議・校内支援委員会・子どもの情報交流会
30分程度の時間を設定し、事前に作成し

た資料を見ながら、子どもについての情報交流を行う。

3 関係機関との連携

- ・ 教育委員会、市の関係機関、SC、SSWと連携を図るにあたり、どのようなことを相談すると有効であるかを、直接話し合う場を設けた。

4 校内研修への位置づけ

- ・ 学習環境づくり
ユニバーサルデザインの考え方に立った授業づくりを進めることで、どの子にもわかりやすい授業づくりについての研究をしている。それとともに、机の中の整理、チャイムが鳴る前に授業の準備をし、机には必要なものだけを出すといった、環境づくりも進めている。
- ・ 支援配置表の作成
日々の支援配置を担当者だけで考えるのではなく、多くの職員が知恵を出し合って作成するために、時間を決めて集まることとした。

各校の取組を交流することで、それぞれが様々なアイデアを出し合っており、取り組みを進めていることを確認することができた。今後、それぞれの取組を詳しく検証するなどして、研究を進めていきたい。



私たち志摩市教頭会は、中学校6校、小学校7校の計13校で構成されています。

年間8回開かれる教頭会では、前半は全体で



の報告・協議・連絡などを行い、後半は校種別や中学校区別の情報交換を行っています。

また、年に4回程度の研修会を実施しており、今年度は志摩市教育委員会事務局の副参事や志摩市役所総務部籍の弁護士を招聘して、今日的な教育課題やスクールコンプライアンスについて講演して頂きました。

学校における身近な法律問題として、「学校事故に対する法的責任と予防」「情報管理」等の具体的な事例を紹介していただき、私たちの日常的なセキュリティ意識や危機管理意識を見つめ直す良い機会となりました。また、日頃からあらゆる事故を想定し、いざという時にどのように対応すればよいのかを事前に確認しておくことで、万が一の事故の際に落ち着いて冷静

な行動をとっていくことの大切さも再確認しました。

こうした研修だけでなく志摩市教頭会では、教頭としての業務や今日的な教育課題等の情報交換をとても大切にしています。時折、学校のことが気になったり、疲れ切ったりした様子で、本会に参加される教頭先生方もおられます。そんな時こそ、日頃の課題や悩みを共有し、ともに考え合い、一人ひとりが元気を創り出す場と

なる教頭会でありたいと願っています。

このように、日々の学校運営で悩んだり、調整等に困ったりした時、教頭会のよき仲間の存在が大きな支えとなっていけるよう、活動を進めています。志摩市の児童生徒が誰ひとり取り残されることなく学び続け、豊かに成長できるよう、私たちはこれからも一層連携を深め、情報交換を行いながら取組を進めていきたいと思っています。



伊賀市教頭会は、29名の会員がつながりを大切にしながら、年9回の研修会を行うなど、活発に活動をしています。会員同士が交流し合ったり助け合ったり、時には教えあったり…お互い支え合っています。

昨年度は新型コロナウイルス感染症防止のため、研修会の回数を減らしたり、オンラインで開催したりということもありました。しかし、今年度は感染対策も行いつつ、全員での話し合いや各部に分かれての話し合いなどを行っています。

具体的には、研修会の中で、「教育研究部会」「経営研究部会」「法政研究部会」の3つの部会に分かれ、テーマ別に各校の取組の交流を行いながら研究をしています。教育研究部では、「教育環境整備における教頭の役割」、経営研究部では、「学校全体の組織力を向上させるための教頭の役割と関わり」、法政研究部では、「学校における働き方改革の可能性」を研究課題として活動を進めています。

また、年に一度ですが、小中部会も設け、働き方改革や新型コロナウイルス感染症対策など、各校の取組の交流をしたり、悩みを出し合ったりしています。

このような研修会があるおかげで、分からな



いことや困ったことなどがあると、教頭どうしで気軽に連絡を取り合うことができるようになりました。また、月に一回の研修会が楽しみのになっています。学校ではたくさんの課題はありますが、こんな今だからこそ、つながりを大切にして、みんなで乗り越えていきたいと考えています。

今年は12月2日（金）に三重県公立小中学校教頭会第44回研究大会が伊賀市主催で行われます。会場責任者や担当者などを決めたり、会場の下見をしたり…と準備を進めています。この大会を通して、みんなで協力し、より多くの方々とさらにつながりを深めていきたいと思っています。



名張市では、市内すべての小中学校においてコミュニティ・スクール及び小中一貫教育を導入し、「夢を実現する力」と「社会を拓く力」

を備えた「夢をはぐくみ 心豊かで 元気な『ばりっ子』」の育成をめざして、市民みんなで名張の子どもたちを育てています。各中学校区で



コミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育に取り組んでいますが、その中で、私の勤務する名張中学校区における小中一貫教育の取組を一部紹介します。

名張中学校区の9年間を通しためざす児童生徒像は「自分で考えて行動できる子」「自他を大切にできる子」です。

学力向上に向けた取組で、大切にしていること3つあります。1つ目は、名張中学校区で作成した「学びの心得」を基本とする「学習規律の定着」です。整理整頓をして環境を整えること、時間を意識した行動、聞き方、話し方など授業のルール of の徹底など、一人ひとりが意識して取り組んでいます。

2つ目は「家庭学習チャレンジウィーク」の取組です。名張中学校区共通の課題の1つに、テレビやゲーム、メディアの時間が非常に多く、

家庭学習や読書時間が少ないことです。そこで、「ノーメディアウィーク」とし、「音楽を聴きながら」「テレビを観ながら」勉強するのではなく、メディアなしで、各学期1回、中学校の定期テスト期間に合わせて、小中合同で家庭学習に取り組んでいます。

3つ目は「小中一貫カリキュラム」です。義務教育を終え、なりたい自分になる力をつけて中学校を卒業する、子どもたちの9年間の出口の姿を共有し、発達段階に応じてつけたい力をきちんと身につけることが小中一貫教育のねらいです。9年間を見通せる各教科のカリキュラムや、ふるさと学習「なばり学」、英語教育、キャリア教育のカリキュラムを作成しました。それらを実践・検証していくのが今年度の取組になります。

人とのつながりを大切にした取組の1つに、「部落問題学習」があります。部落問題学習に重点を置いて取り組むなかで、まず教師自身が「部落問題とどんな出会いをし、今どのように考え、どんな行動をしているのか」今の自分を振り返ることが大切です。部落問題を自分の問題として捉えるために、一人ひとりが「自分と部落問題」を語っているか。経験浅い先生たちが多いなか、教職員同士が話をする場が必要だと考えます。9年間を通して、差別をなくす主体者になれるよう、豊かな人権感覚を身につけた実践力のある子どもの育成をめざしていきたい。



紀北教頭会は、紀北町と尾鷲市の学校で構成されている総勢19名（小学校13校・中学校6校）の小さな教頭会です。また、私が属する尾鷲市教頭会は小学校5校、中学校2校とさらに小規模です。7校は、中規模2校と小規模校5校に分かれ、児童生徒数や職員数の違いから、学校によって課題に違いがあります。中規模校では圧倒的に授業準備、生徒指導、小規模校では少ない職員での行事の企画立案や準備、校務分掌の掛け持ち等です。一方、どの学校も若い教職員が増加しており、それも他地域から多くの初任の方が採用されているため、田舎特有の地域性を知らずに仕事を始めなければならない大変

さもあります。小さな町ですが、校区ごとに地域性が大きく違い、当然、教頭としての関わり方も違ってきます。しかし、教頭同士のつながりは強く、ざっくばらんに話ができる強みがあります。

今年度、尾鷲市教頭会では、「教職員の専門性に関する課題」を研修課題に話を進めています。以下、これまでの研修で出されたことを紹介します。

①教師の専門性とは、子どもを理解する力（アセスメント力）と教える力（授業力）である。子どもを理解し、個々の児童の発達段階や特性をアセスメントして、把握したうえで授業に反

映させていくことであり、特別支援教育にあるエッセンスを通常学級に取り入れ活用していくことが求められる。

②「学校における働き方改革」は学校運営に一定反映されているが、勤務時間は決して削減されていない。この課題を解決するために、職員の時間管理がどのようになっているのかを明らかにしていく。「だれが」「何に」時間をかけているのか・かけたいと思っているのか・かかっ

てしまっているのか、それぞれの仕事内容にかかわる意識的な部分を把握し、一人ひとりがやりたい仕事をできる時間の作り方を考えることで、自らの専門性に向き合える時間を勤務時間内により多く保証できるようにする。

学校現場の状況を考えると、容易なことばかりではありませんが、7名のつながりをさらに深め、一歩ずつ前進していけるよう、力を合わせていきたいと考えています。



尾鷲湾

つながりを大切に

紀南公立小中学校教頭会 御浜町立御浜中学校 岩本 修 吾

今年度の紀南教頭会総会は、各市町教育長、各校教頭先生方、施設関係者のご理解とご協力を頂き、一同が会し参集型で実施することが出来た。その際の挨拶で次の事を述べさせて頂いた。

「コロナ禍の状況は、これまでの教育活動を当たり前でないものにし、人が交わり、触れ合うことの多くを奪った。教頭会も同じく、総会、研究大会で集い、課題の共有や親交を深められず、他市町の教頭の事を知らないまま、転勤された方も多くいた。改めて、“知らないまま”でいることのさみしさ、“繋がる”こと、“繋がっていること”の大切さを痛感した。今日は、今日的な課題の解決に向け、研修活動の充実、情報共有、連携、そして改めて“繋がること”を大切にする第一歩の日としたい。」

ここ数年紀南教頭会は、27名中約3分の1か

ら半数の方が初めて紀南の地にみえた、他地域出身の教頭先生方という人数構成である。研修活動を通じ、新しく紀南にみえた教頭先生方から、これまでお勤めの地域の研修の様子や経験に基づく示唆を頂き、また紀南地方の取組を知って頂くなど、互いがそれぞれの長所、短所



を出し合いつつ、各校での教頭としての取組に向け研修を深め合ってきた。また情報交換や懇親会では、公私で深まりのある話をするなど、ひじょうに貴重な機会を得てきた。

教頭職は多忙で、学校を回しつつ地域とつながり、広い視野で教育に向き合い、教職員の育成も担う。これまでの“経験”という自身の教育財産を発揮しつつも、時には“知らないこ

と”“経験のないケース”の事案にも向き合うことがある。そんな時、教頭どうしの日常的な“繋がり”や“交流の場”があればと、とても心強く思う。

今年は、“繋がり”を深め、紀南の地で一人一人の教頭先生方が生き生きと充実した日々を送れるよう、教頭会としてできるだけの活動を進めていきたい。

夏季教頭会研修会に参加して

いなべ市立藤原中学校 島田 美樹

令和4年度夏季教頭研修会は、参集による研修と録画視聴・書面による研修の二つのパターンに分けての実施となりました。第一部は、三重県教育委員会福利給与課主幹兼係長前川晶子さんによる「給与制度の基礎知識」についての講演でした。「給与」とは「給料」に「手当」を可算したものという説明から始まり、初任給に、採用前の経験をどのように反映させているかといった初任給に関する知識や、昇格・昇給についても資料をもとに教えていただきました。最後に、退職手当と定年引上げの関係についても話していただき、給与表について理解だけでなく、私たちの教育公務員としての責務を改めて自覚しながら、給与について自分事として学ぶことができました。

第二部は、三重大学教育学部附属特別支援学校副校長、三重大学大学院教育学研究科教授中川克巳さんによる講演でした。『『最優先事項』を優先する学校経営』という演題で、前津市立東橋内中学校校長としての5年間の取組についてご講演いただきました。中川先生は、本来有

能である教師の主体性を奪っている取組を全てスクラップされ、新たな子どもファーストの取組を創造することで、諸課題の解決へとつながられたのです。リーダーとして教師の資質・能力を最大化させるマネジメントを行い、子どもが将来自立し、社会の構成員となっていけるような教育活動を展開することで、学校に「主体性の文化」を構築されました。先生の講演は、すべての教育実践に、「私たち自身の教育観」「確固たる軸」があるか、そこに「目的を達成する強い意志とプロセス」があるか、私たちに優しい眼差しで問いかけられた時間でした。これまで受け身だった「学校の主体性」を見事に開花させた中川先生の取組は、山積する教育課題に立ち向かう私たち教頭を元気づけ、鼓舞していただきました。

今回、200名以上の教頭が3年ぶりに一堂に会した場面は、県教頭会という組織に属する仲間間の存在を改めて意識する機会にもなり、大変有意義な時間となりました。

